

## 満州国境守備隊

### 終戦からの脱出行(二)

神奈川県 大矢 東

―秩序をなくした軍隊―

薄暗くなつた馬廠山を二班に分かれて出発することになった。一班は歩兵の高橋中隊長、二班は砲兵の高橋中隊長と二十人ぐらい、二班は一班の二十分後に出発、自分はただただ隊長に続く。先は凄しい山だ。太い木はなく、岩石の急な斜面は切り立って垂直のように思える。石に足をかけ、片手で木に掴まって、ついに三百五十メートルの馬廠山を降りることが出来た。

山を降りた所で今晩は野宿、ここは砲兵隊の射撃場のあつた水道橋という所で地形は少し分かつている。野菜を探しに先に出た者が白茄子を何本か取つて来た。茄子の刺が強くて手の指に刺さつてしまった。野菜不足からか蕁麻疹が出ていた。コンクリートの土管内で野宿している夜中、左腕のずきずきした痛みで目が覚めた。頭の芯まで抜けるような痛みだ。ずきずきと脈動が激しい。一人で我慢するしかない。耐えるしかない。考えると、山を降りる時、体を支えた木や枝などを掴んで、まだ治っていないが傷口が化膿し始めたのではないだろうか。皆疲れてよく寝ていた兵たちがぼつぼつ起き出し出発の準備に入る。

山の斜面を音を立てないように歩く。痛みはず

きずきと頭に響き、一緒について歩くのがやつとの状態だ。一時間ほど歩いた所で小休止になった。集合してみると高橋砲兵隊長ほか五人も少ないことが分かった。聞くと昨晩のうちに先に出たという話である。勝手に行動する隊長は何と無責任なことか。ただ我々は黙って再度歩き出す。急に戦車の音が聞こえ、斜面を戦車が登っている。二百メートル以上先の広場は大豆やトウモロコシ等の食料の集積場のようだ。警戒しながらゆっくりと前進する。

綏芬河の支流に出た。暗い晩である。茅が多く、音を立てずに草を踏みながら歩く。

月が昇ってきた。いよいよ渡河だ。裸になり荷物は頭上に載せ茅で作った縄を持って、「一番先は自分が」ということで腰に細い紐をつけて渡る。そう深くはないが流れは早い。一番深い所でも一メートルぐらいだがそれでも大事をとって、細い紐は岸の柳の根本にくくりつけ、無事に渡る事が出来た。急いで服を着て次の準備をする。

綏芬河から北の方角に登った所は穆稜の陣地かと思う。少しばかり畑があつた。そこには丸裸にされた日本兵がごろごろと横たわっていた。このように大勢の戦死者の姿を目の当りにして激戦のことがうかがえる。

乾パンもついに底を突き、何もなくなった。水もないので川や水溜りの水を飲んだ。口に入れるものは何もない。暑い汗も出なく、すべての物が重くなつて来た。

玉蜀黍畑があつた。広々とした丘である。見付からないように畑に潜り込む。早い者勝ちだ。玉蜀黍の中の一カ所に卵ぐらいのメロンがあつた一個取つて敵に見付からないように寝そべって食べる。玉蜀黍のひげも食べてみたが結構食べられる。皮をむいて芯まで食べた。敵に見付からないうちにと畑を抜け出し人目につかぬように山の中を歩いた。

山林をようやく抜け出し谷へ降りて行く。足が重い。今日一日食物はなく、水だけだった。自分

の傷は渡河した時に水で冷したせいか痛みは止んだ。しかし日増しに赤く腫れ重くなってきた。

山の峰伝いに行くと、突然飛行機の音がしたので、急いでそれぞれ思う所に隠れる。飛行機は一回で行ってしまおうと思っていたが、谷を縫うように何回となく回って来る。飛行機の音と銃の音との区別がつかない。二人乗っていて後のが撃っているのが低空なのでよく見える。横倒しになっている丸太を突き抜けて、弾が目の前でパチツと落ちた。湯気が出ている。こんなに撃たれては頭も出せない。ここでは一人もやられずに終わって、場所を移動した。

再度畑があった。玉蜀黍畑でここにはメロンはなかった。玉蜀黍の実はごく小さいが生のまま噛ってみたところ牛乳のような味だ。食べられると分かったらガリガリと何本も夢中で食べた。日増しに実が硬くなるともう生では食べられない。夜になってから焼いて食べるようにした。美味しい。一食に大きいのを三本ぐらい食べると、ちよつと

む。水筒にも静かに入れる。

四メートル以上もある垂直の岩を登ると、そこに鉄道がある。三人が梯子はしになり、一人が土手の木につかまって上に登り、四本の帯革をつないで上から一人一人引き上げて、ようやく全員登るところが出来た。この鉄道は東寧より牡丹江に通ずる鉄道である。

ほんの二十歩ぐらい行った所の鉄道の溝に何人もの日本兵が死んでいた。無残な姿だ。側には両親や家族や子供を抱いた写真などがある。死体に石を載せて一人一人に手を合わせ、水筒の水を掛けてやる。

線路を歩いて行くとカタンコトンと線路に音がする。四十メートルぐらい土手を登って見張っていると、満人が二人、手押しトロッコを走らせて通り過ぎて行った。暗くなった。駅が見えたので我先に駅へと駆け、駅の中に全員入る。皆で地図がないかと夢中になって探す。駅の中は足の踏み場もないほど本や紙が散らかっている。その時駅

満腹感がえられる。たまに大豆の青豆を煮たが、これは取るのに手間がかかりすぎる。玉蜀黍は何本も焼いて雑糞に入れ携帯していた。

見渡す限り平野だ。畑と原野が半分半分になっている。敵も人さえもいそうもなかった。遠くに三角の渡船場のような小屋があり、そこには粟が二升ぐらいあった。袋ごと持って山に入る。

曇ってきた。戦争が始まって以来の雨になった。思い思いに天幕を張って、その中で粟を分けて飯盒で炊く。砂が多くて粟だけを食べるのは容易ではない。大変な粟飯にありついたものだ。小雨は降るし、大変であった。でも、やつと飯を食べたような気がした。

密林の中を歩き、食物も水も切れて三日か四日目、斜面に鉄道を守備するコンクリートの壕が三カ所見付かった。ガサガサと降りて行くと、谷にかかった三十メートル程の鉄橋があり、その下の三坪ぐらいの溝に岩水が溜っている。水を動かさないように四つんばいになって、思う存分水を飲

名は「綏寧」と分かった。欲しいものは一つもない。駅から線路を渡って、暗闇の中を一段降りて駆け出すと水溜りの中であった。十六人が一斉に水の中を駆け、十五メートルばかり先の土手の斜面を次々とよじ登る。

真中に道のある坂である。そこは大豆や玉蜀黍の集積場のようであった。大豆が袋から出ていて、その中を通るのに豆に足を取られ、抜けるのは容易ではない。ようやく抜け出すと小楯がつながっている広い山林だった。もう大丈夫だと思つと、急に疲れが出る。そのまま皆眠ってしまった。朝方三時半頃、コケコッコと何度も鶏の鳴くの気が付く。起きて見ると、満人の民家がいくつも建っている。そのすぐ庭先に寝ていたのだ。これはいけないと、急いで再度山の中へ逃げ、民家から遠のいた。

― 撤退の疲労重なる ―

早朝、霧が降りて体はびしょびしょになる。急斜面を登ることに決めて、草につかまり登る。朝

日が昇り、たちまち草も乾いて歩きよくなった。

森田軍曹の腰を押して登って行く。途中まで登ると「もう駄目だ」と森田は動かない。かすかな声で「俺に構わず先に行ってくれ。足手まといになるだけだ」と、頼む。止むを得ず自分の水を全部森田軍曹の水筒に入れてやって「元気になって頑張れよ、森田」と言つて本当に別れた。森田軍曹は朝日に向かってすやすやと休んでいた。登りながら何回も振り返って見たが、動こうともしなかった。我々はやつとのことで登り切り、今度は峰を歩く。食べ物もなくなつて、畑を見つければ駄目だ。頂上から畑を探す。

丘のなだらかな斜面は腰丈ぐらいの木の株と草だけ。急に車の光が射す。一瞬草の中に伏せる。道路より三十メートルと近くだ。伏せたまま車の来る方向に横になつて台数を数えた。千台ぐらいまで数えたが、その列は二時間ぐらい続いた。車の先を見ると、夜の山並みに光が点々と蛇行して、物凄く帯のように長い。

かない。火が燃えていると、近寄らないで通り過ぎていく。

峰伝いに歩いて行くと楯山になる。山を抜けると、広々とした田圃があつた。稲が刈り取られている。穂がついているのを取つてみると、一つの穂に米が五、六粒ぐらいで後は全部糶だ。落ち穂を拾つて、一粒一粒爪で籾をむいて食べながら歩く。ふと故郷の親父さんは米を作つたかな、よく取れたかなと思ひながら、敵に見付かつてはと、皆と一緒に山の中を歩き続ける。

薄暗くなつた野菜畑から玉蜀黍を十本ほど採り、抱えて歩く。所々に水溜りがある。そして野宿の場所を見つける。

石山と二人で少し高い所に陣取つて、枯れ枝を集めて来て燃やす。皆ちよつと大胆になつて来た。声も大きく聞こえる。石山と玉蜀黍を焼いては黙々と食べる。残りは雑糞に入れる。満腹になり休む。

野宿をする。なだらかな斜面で、草丈が身長倍ぐらいある。水音がするので、草を分けて水を汲みに行く。そして出来るだけ煙が出ないようにして火を焚く。

傷から膿が出て、左の服が抜けない。石山上等兵に頼み、袖を十五センチほど切つて貰つた。物凄く赤く腫れていた。水筒のお湯で消毒し、傷口へ茅の芯を差し込む。痛くないが五センチも入る、抜くと膿がどろどろと出る。重かつた腕もだいぶ軽くなつて楽になり、よく眠れるようになった。その後毎日一回は膿を出すことにした。

寒くなつてきた。火を焚いて野宿する時期になつた。暗くなるとキョーキョーキョーと山鳴が夜通し鳴き続ける。山鳴は寂しがりで、はぐれた山鳴が夜通し鳴いているという。山鳴も十一月下旬頃になると鳴かなくなる。

今度は狼に注意しなければならぬ。兵隊も年に何回か食われるという事故がある。移動も早いので、近くに來そうな時には前もつて火を焚くし

— ついに同行六人に —

朝起きて、また悠々と火を燃やし始めた。風がないので煙は真っ直に高々と上がつて、七カ所の煙柱が立った。まだ出発の準備もしていない時のこと。下の方から「兵隊さん、兵隊さん」と呼ぶ声がある。かと思つと銃声がパンパンと三発聞こえた。急いで火を消す。「兵隊さん出て来て下さい」と繰り返しまがホンで呼んでいるらしいその声は、だんだん近寄つて来る。気の早い者は何人も山へ登つて行つた。するとDが撃たれて即死。すぐ横にSが「殺してくれ」と叫んでいる。

上を見ると、銃を持って二人立っている。とつさに「石山、先に行くぞ」と言つて溝に隠れ駆けに行く。自分が逃げた時は一番最後であつたらしい。K上等兵は足をやられて、石に血を点々とたらしながら左の土手を上がつて山の中へ逃げた。自分はどんだん谷を上がつていった。

銃声も呼び声もなく静かになつた。登り切つたところの湿地の中に身を隠していると、先方

で手を振っている者がいる。急いで行って藻草の中に隠れて夕方まで待つ。

私を含め六人が、沼地の中で小声で名乗り合った。今日からはたった六人で行動しなければならぬ。薄暗くなつて湿地が出る。峰を歩くと五坪くらいに畑に大根があつた。まだ小さいが一本抜いて食べてみる。甘く感じた。雑嚢に入れてあつた焼き玉蜀黍を出し、少し食べて飢えを凌いだ。

―越冬場所を探す―

九尺二間ばかりの小さな一軒家が谷間に建つていた。近付くと「日本人に告ぐ。通ずるものは白旗を掲げムウリン街に来たれ」と書いてある。敵の策略だ、と帯剣で壁をつつついて字を消す。そう簡単に引つ掛るか。

晴れの日が何日も続く。湿地も少しのぬかるみがあるだけで乾いている。五十メートルほど先に大分古い樵小屋が見えた。湿地に、一枚ずつ板を並べて小屋まで行けるように道が出来ている。戸を開けてみると、真ん中に一メートル四方ぐらい

の土間があり、周りは板敷きで敷物（ソウリヤンズ）が敷いてあり、誰か一人寝ている。「おいおい、戦友！」と言ったが返事がない。近寄つてみたら死んでいた。よく見ると、襟章は星一つで二等兵だ。左の物入れの所に「S」と名前がついている。まるで生きている者が寝ているようだ。

家が四軒あつた。二軒はかなり大きい。一棟は、四間×六間、並んで四間×四間ぐらい。離れて少し小さく二間×四間ぐらい。そこには大小一個の手鍋付きでオンドル式の家であつた。十分に生活出来そうだ。鋸やシャベル等の道具もある。石臼もある。それに近くには小川もあり、畑には玉蜀黍・大豆・きび・大根・南瓜・西瓜・瓜等よく実っている。食糧は十分だ。その上大八車まである。馬も豚もいる。今までで一番良い条件に恵まれている。寒くなつて来たので、ここで越冬することに決めた。

西瓜を食べる。腹一杯になる。すぐにまた腹が空く。夕方になつてきびを穂から五合ぐらい取つ

て平鍋で煮た。量が倍にもなつた。早速食べたが、皮つきのままなので口の中に残り、ちよつとやそつとでは食べられない。

屋根付きの家での就寝は二カ月ぶりぐらいだろうか。翌朝は早く起きて小川へ行って顔を洗う。生き延びた感じが心地よい。この谷間は静かで、これで戦争の最中なのかと思つた。

越冬することになつて、家の外などを見て回ると風呂敷包みが茅の株の中に置いてあつた。広げて見ると、なんと勲章・略章と賞状等がたくさんあつた。「加藤」「佐藤」などと記名されていたように記憶している。勲章、次は略章と、それぞれ胸に付けて山を上がり下りしているうちにバラバラと全部落ちてしまった。賞状は風呂敷に包んで茅の中に隠しておいた。

二日目、散歩していると、満馬が三頭長閑に草を食んでいる。するとがさがさと音がして敵かを一瞬緊張したが、七、八頭の親豚の群れだつた。竹竿の先に鳶口がついている棒で豚を捕まえよう

としたが、豚の足の早いのと棒が長過ぎたのとで捕まえられなかった。

静かで晴天である。降雪を予想して、千坪以上の畑の玉蜀黍を、一本ずつ全部収穫して大八車で運ぶ。収穫が終わつて、山の斜面にあつた炭窯の中に隠した。西瓜を食べて後は西瓜糖を作つた。甘い甘い。良く出来た。草の中に焼酎甕があつたので、綺麗に洗つて西瓜糖を入れた。出来上がつてみたら甕に二本にもなつた。これも非常に備えて草の中に隠す。玉蜀黍の粒を取り南京袋に十五俵も収穫出来た。大豆も一俵出来た。物置にあつた唐辛子は何にでもつけたり入れたりして食べた。

澄みきつた晴天。越冬の準備も終わつて畑の中を歩いていると、山脇から自動車音が急に音を立てて来た。草の中に隠れる。四人の兵隊が鉄砲を持って車から降りて来た。日本の軍服を着ているが満語を話している。夕方までそちこちを見回つて、家の中なども見ていた。

三人ずつ分かれて隠れることにした。とにかく敵が来ているので音を立てることも話すことも出来ない。息を止めるようにして通り過ぎるのをじっと待つ。暗くなる頃ようやく車が音を立てて帰って行った。敵の車が帰った後、お互いに無事なたたえ合うが今日はまだいつもの所には帰れない。山裾を上がって行くと室があった。ここが作戦を練る場所に決まった。

畑の角に三メートル四方ぐらいの穴があった。梯子が架かっていたので中に入った。そこで六人で話し合いが始まる。敵は必ず明日も来る。移動しなくてはならないと決まった。明日の移動のために早く寝る。

早朝、宿にしていた炭窯に行ってみた。何ともなっていない。しかし、敵は昨日様子を見に来ていたので、今日は必ず来ることが予想される。移動が決まると準備は早い。食糧は持たず、鋸二、スコップ四、ガラス一枚、板二枚、針金と釘を少し、雑囊に一杯の唐辛子等を持って山の中へ逃げ

に並べて、草を刈って隙間に入れ、掘り上げた土を載せて雨が漏らないようにする。そして所々に草を植える。

外から見付かりにくいように深さは二・五メートルほどオンドルを作ることにした。床板は、生の丸太屋根と同じように、隙間に草を詰めて土を平らにする。ついに完成したが、土はまだ乾いていない。オンドルを焚いたが、それでも乾かない。草を取って来て敷く。寝てみたが、冷たくて眠るどころではない。

長く坐っていると尻から腰まで冷えてしまい、横になったり起きたり、一晩中暖炉で暖をとつてうとうとするのがやつとだ。

鍋でお湯が沸かせるようにも竈も作った。平鍋の大きさは直径四十センチぐらいだ。空洞になっている白樺の木を取り付けて煙突にした。ガラス一枚で明かり取りを作った。これは見張り用にも使える。二日間で住居が出来上がった。

零下二五度もする毎日、食糧調達に何キロも歩

る。

山頂に着いて下の見渡せる所で休んでいると、やはり敵は大勢やって来た。二十人ぐらいが車二台でやって来た。さらに山の奥に入り一日中辺りの様子を見て歩き、やつと越冬場所が決まる。唐松と樅の木の密林だ。頂上に果てしなく広い水源がある。水量は多く流れている。川を南にして高い場所があり、日当たりも良い。まず場所を決めて、大木の下で野宿することにした。

密林を歩き奥まで入った。野宿していても静かな夜は山鳴の鳴き声が聞こえる。寒くなると鳴き始めた。休んでいる晩のこと、今日はもう何日になつたかという話しになった。早くも今日は明治節だ。このままだと越冬出来ない。住居の準備をすることに決めた。

― 厳寒の満州での越冬 ―

鋸とスコップで大きさは約二間半の穴を掘り始める。そして二人は木を切り始める。一日目は掘るだけで日が暮れた。二日目は切った丸太を屋根

いて往復する。敵に悟られないよう雪の山林の中の道なき道も同じ所を二度と通らないようにする。軍靴の底が擦り切れて穴があいてしまったので草鞋を作ることにした。草を編んで作った。これで足も温かくなり凍傷も避けられそうだ。だんだん自分のことは自分でやらなくてはならないと思うようになって来た。お互いに体力がなくなってきたのである。

越冬するための穴掘りが終わって、どうにか寝る所が出来たが食物は全くない。こんな山奥の密林まで敵は来ないだろう。早くも今日は十一月六日か。零下三〇度にもなつて来た。動いていないと体中が冷え込んで震えるようだ。

山の峰を歩いて、あらかじめ目星をつけておいた玉蜀黍畑にいつか玉蜀黍を持ってだけ毛布に入れて背負って穴に帰る。初め背負った三十本ぐらいの玉蜀黍がいつか滑り落ちたのだろう。着いてみると二十本ぐらいになっている。人により体力にだいぶ差がある。多少を口にする者は誰もいな

い。頑張るしかない、と自分に言い聞かせる。

初めて食糧の調達をした翌朝、鍋で玉蜀黍を煮て朝食を食べる。何とか腹ごたえを感じるほど食べた。床も徐々に乾いて来て寝られるようになった。

寝ているうちに雪が降り、三十センチ以上も積もっている。一面白一色になった。戦争が始まって以来大した雨も降らずにいたが、我々の越冬準備が完了し、食糧の調達も出来てほっとしたら雪になった。天は我々に生きる道を授けて下さったのだ、と自分は直感した。

雪では屋外に出られない。それに身にしみる寒さ。二日か三日分の食糧はあるので休養することになった。燃料は目の前が立枯れの山なので薪は取れる。雪が降ってから日増しに寒さが厳しくなってきた。零下三〇度。ただ毛布があるだけでは越冬出来るかと心配になってきたが、それ以上に食糧が心配になってきた。これ以上雪が降り積もると食糧の調達が難しくなる。早いうちに取

尽きてしばらくして、急いで玉蜀黍を取って山に登り、峰伝いを歩いて帰りに向かう。今日の照明弾には驚いた。今までにないことだ。

食糧の調達が日課となって、雪の密林の峰を歩く。軍靴の底が擦り切れて、草鞋を靴の下に履く。雪は山頂でも深い所では七十センチも積もっている。出来るだけ積もっていない所を見つけて歩く。雪も何回か降り積もって、いよいよ寒さが厳しくなり考えられないほどの寒さだ。零下三〇度以下ではないだろうか。しかし、手袋もない。ようやく軍曹が

「取りに行くのを止めよう」と言った。皆が待っていたかのように、すぐ決まった。時に今日は何か、と皆で日を追って計算してみると、結論は十二月二十九日になった。

食べる物がないので、そう毎日排便をしない。零下三〇度もする屋外で囲いもない所が便所になっている。丸太を一メートルほど上がって出来るようにしてある。大も小も一カ所に。小便は日に

りに行かなくてはなるまい。午後に畑を指し玉蜀黍の実を取る。早い頃は実は立っていたが、雪が降ってからは全部下に向いている。敵に悟られないように一人一人別な所を上がり毎日歩く所も変える。帰って来るといつも夜中になる。体を温めて玉蜀黍を煮て食べて寝る。そして毎日同じように調達に出掛ける。

夜でも雪で外は明るい。湿気のないさらさらの雪で握っても玉にならない。息で吹くとまるで灰のように飛んでしまう。一晚で足跡も消えてしま

う。ある時一本の通信線に足を取られて雪の中で倒れた。敵が近くにいるかも知れないから注意するように、と小声で伝言が来た。すると五分もしないうちに谷間に照明弾が高々と上がった。雪で照明が余計に綺麗に見える。雪の中で横になって動かぬようにうずくまり、隠れるようにして眺めていた。体がだんだん冷え込んで、目の前に玉蜀黍畑があるが、取ることも出来ない。照明弾が燃え

三、四回はする。凍りついてピラミッドのように一日一日高くなって行く。臭いは全くない。見事なほどに高くなって行く。小便はいいにしても大便は至難だ。零下三〇度で風も吹く。尻も凍りつく。ぼやぼやしていると凍傷になる。そうなったらそれこそ大変だ。

二月上旬頃いよいよ食物がなくなってきた。穴に隠しておいた玉蜀黍を計算してみると隠す前に計っておいたのでは大分量が違う。鼠に喰われていたのである。食べ物を探しに行こう、との声にK伍長は「自分はここで一人で待っている。皆で行ってください」坐ったまま言った。それでは、と四人で行くことにした。

南斜面の暖かい所には草の芽があるはずだと歩き回らない。いつの間にか駐屯していた所まで来ていた。じっと立ち止まって見直し、あっと驚く。向こうの山に積み上げて置いた薪がなくなっている。一本も残っていない。よく見ると多くあった赤大根も全く見当らない。見付からないよう

にと気をつけながら帰る。途中暖かい所に蓬よもぎの枯れたのを見つけた。根元に新芽が三センチほど伸びている。四人でようやく一つかみほど取れたので持って穴に帰った。

穴の中に入ると、K伍長が壁に寄り掛っている。「K伍長、K」と呼んだが返事がない。小銃を持って自決している。座っている横には、責任を持って預かっていたマツチ（ヤンホ）が丁寧に置いてある。やっぱりそうだったのか。体力が全く無くなっていたのだ。精も根も尽き果てたのか。紙と鉛筆があったら色々書きたかったのかも知れないと思ひ、かわいそうでたまらない。

四人で屋外に運び出したが、その軽さは何とも言えない。骨と皮ばかりになって三十キロもないほどだ。故郷の新潟の方面に向けて手厚く葬る。皆でK伍長の死を無駄にしないよう頑張ろうと話し、自分自身にも勇気づけた。

食う話は毎日するが、口の中にも胃の中にも入ってこない。生唾を飲むだけだ。蓬団子の話にな

服の穴から入る冷気がことさら寒い。繕つくろうにも針がない。針を作ろうと鉛筆の芯ぐらいの針金で作って見ることにした。一尺ほどの針金を火の中に先だけ入れて焼き、赤くなった所を石の上で素早く打ち平らにする。二度三度と繰り返し糸穴を開け穴を滑らかにする。一寸五分ほどの長さで切つて、先を尖らせ一本の針の完成だ。何本も作って軍服や下着を繕うことが出来る。

腰下の紐の糸を丁寧的一本一本引き抜く。全部糸にして全員で分ける。作った針とこの糸で繕いが出る。大沼先輩が一枚の手拭を出して糸を抜き、足の親指に巻きつけて一本一本手の指で繕より糸を作る。一本の糸を作るのも大変な苦労と技術がある。糸を作っては繕よりをする。こうして軍服の穴が塞がり、冷気も入らず寒さも凌ぎやすくなつた。

いよいよ越冬も終わりという一週間前頃、野草を見つければ帰って来ると、左足の親指がむず痒い。それから二、三日で痒みはなくなった。

つて、ふと大沼先輩が「山形では雪の下から一番先に出て来るのは山牛蒡の葉で、蓬の代りに青く色づけするのに使うのだ。もう出ているはずだ」というので見つけに行くことになった。四人で探しながら歩いていると、それらしき青い葉が出ていた。三十ほどの芽があった。喜んで採って帰り、早速煮て食べるがこれは苦くてとても食べられる代物ではない。だが「良薬口に苦しと言うから」と言つて無理に食べる。翌朝大変。腰が抜けたのか、ふくらはぎがつり上がって足が思うように動かない。自分だけではない。全員がそうだった。早く胃袋から出すことが肝心と、一生懸命に鍋をよく洗い、湯を沸かしてどんどん飲んだ。が全然駄目、外へ小用に行くにしても膝をついての四つんばいで、立ち膝での小便には困った。あれは毒草だったのだ。もうこれでおしまいかと思つた。全快までに五日も掛つた。

着たきりの軍服は、飛び火で出来た小さな穴だらけになったまま。零下三〇度の越冬生活もこの天気がいいので外に出て倒木に腰を下ろし、底の抜けた軍靴を脱いでみたら、親指の皮がぶかぶかになっている。どうしたのだろう。指の皮を引っ張つてみると、なんと爪も一緒にすぼつと抜けてしまった。指は丸裸になって、薄赤く綺麗な色になっている。化膿でもしたら歩けなくなる。早く皮は厚く爪は硬くなって欲しい。日が経つにつれ皮も爪も徐々に硬くなった。

夢を見て、何回となく母親が「戦争は負けたのだ。早く山から出て来い、出て来い」と夢枕に立つのだ。しかし、そんなことは言えない。女々しいぞと言われるかも知れない。

南斜面や峰の雪が解けてなくなってきたので、草鞋を作らねばと枯草を探しに行く。もちろん、周囲への警戒は怠らない。二日ばかり草鞋作りをした。また三本縄のロープも作る。入隊前の薫仕事カウジがここでも非常に役立つ。

落合が山の中を巡ってきて「少しは根元に芽が出ているようだ」と言つた。二人で出掛ける。枯

草の中を歩いて南斜面の暖かそうな所を探していると百合の芽があった。嬉しかった。初め落合が手で掘ったが深いので時間が掛って容易ではないので芽だけを探ることにした。両手でつかみ切れないほど採れた。夕飯は百合の芽の水煮にした。美味しく食べられて元気がついた。

明日はいよいよ越冬をしていた穴から抜け出す日だ。寝ていても考えていても、体が衰弱し切っていると思う。一日百五十粒の玉蜀黍だけだったから無理もない。力もなくなっている。明日からは食べ物もない。だんだん弱気になるばかりだが、なにくそ！ 自分だけではない。四人が全員同じなのだ。頑張らなくては駄目だ。とにかく力を合わせ命令を守り、持っている責任を果たさなければ、と自分を励ます。

すると凍傷になった足が気になる。指の皮がまだ硬くなっていない、軍靴の底はないし草鞋を履いての歩行に耐えられるか、心配事が次々に出て来る。また一方で、大丈夫だ、何とかなると励ま

注意しなければならぬ。兵隊も年に何回か喰われるという。

遂に執筆者を含め、今日からは六人で行動しなければならぬ。薄暗くなって湿地が出る。峰に五坪くらいの畑に大根があり、食べてみると甘い、そしてまた雑嚢に入れてあった焼き玉蜀黍を出し、少し食べる。

とうとう家を見つける。四軒あった。二軒はかなり大きい。それはオンドル式の家で、生活出来そうである。近くには小川もあり、畑には玉蜀黍・大豆・きび・大根・南瓜・西瓜・瓜等が実り、馬も豚もいる。寒くなって来たので、ここで越冬することに決めた。

着たきりの軍服は、飛び火で穴だらけになった。零下三〇度の越冬生活もこの服の穴から入る冷気が寒い。針を作ろうと鉛筆の芯ぐらいの針金を火の中に入れて焼き、赤くなった所を石の上で素早く打って、さらに糸穴を開ける。何本も作って軍服や下着を繕うことが出来る。糸は腰下から丁寧

す。きっと神や仏がついていてくれる。何度も何度も「南無阿弥陀仏」と唱える。そして明日の夜明けを待つ。

#### 【解説】

体験記執筆者は、八月二十四日に生き残った兵士達で、勾玉陣地を脱出する。困苦の山野の放浪を描き、遂に現地での越冬を決める。このため酷寒零下三〇度の満州の密林に穴を掘り、夏服装、わずかに得られた食糧と野草、鼠、蛇、蝮、蛙などを食べ、最後は一日玉蜀黍百五十粒で飢えをしのいだ実情話克明に記録している。

玉蜀黍畑を見つけて見付からないように畑に潜り込む。一個取って見付からないように寝そべって食べる。玉蜀黍のひげも結構食べられる。皮をむいて芯まで食べた。畑に卵ぐらいのメロンがあった。

寒くなって、火を焚いて野宿する時期になる。暗くなると山鳴りが夜通し鳴き続ける。今度は狼に

に一本ずつ引き抜く。また手拭を出して糸を抜き、指で繕う。

一本の糸を作るのも大変な苦勞と技術がいる。糸を作っては繕いをする。こうして軍服の穴が塞がり、冷気も入らず寒さも凌ぎやすくなったという。解説の取材に伺った時、この針と糸を見せて貰った、六十年前の感触が生々しく、伝わってくる。

こうしてはいよいよ越冬も終わりという一週間前頃、外には野草が萌えていた。